

## [国 語]

## 漢字学習の意欲を高める指導の工夫

栗林 育雄\*

## 1 主題設定の理由

初めて担任するクラスでは、どれくらいの漢字力があるかを見極めるため、1年生配当漢字からすべてチェックすることにしている。今回、対象となる児童（5年生）は、半数以上が2年生配当漢字からつまずき、3年生配当漢字を半分も書けない児童が3割近くいた。作文を書く際、「いく」「くる」「いう」「はいる」「つくる」といった語でさえも、ひらがな表記で済ませるということが当たり前の状態であった。高学年児童として深刻な状態である。「漢字の学習は好きか。」と問うたところ、全員が「好きではない。」と答えた。理由の多くは「練習が大変。」「おもしろくない。」「ひらがなでも、別に困らない。」ということであった。

日本教育技術学会・基礎学力調査委員会の「小学校学習漢字習得状況の調査報告」<sup>1)</sup>によれば、漢字の習得を左右する要因は「①学習意識（好きか嫌いか）」「②生活環境（テレビの視聴時間）」「③学習教材、学習方法、授業での取り扱い」となっている。確かに年間200字近いペースで漢字を学習していくのは大変である。「テストのために仕方なく練習する。」「宿題だから決められた回数書く。」という意識のままでは、漢字学習への主体的な取組は期待できない。

しかし、大人には区別することの難しい200種類以上にも及ぶゲームキャラクターを、誰に教わるというわけでもなく認識する力をもつ児童たちである。興味・関心さえもたせられれば、漢字であっても主体的に習得できるようになるはずである。そこで、漢字そのもののおもしろさや奥深さに目を向けさせ、楽しみながら漢字を調べたり、まとめたりする活動に取り組ませることから授業改善を図ることが大切であると考え、主題を設定した。

## 2 研究仮説

学習教材を工夫して漢字そのもののおもしろさに興味をもたせ、児童の実態に応じた課題の提示と支援を行えば、児童は意欲的に漢字学習に取り組み、漢字を主体的に習得することができるようになるであろう。

## 3 研究の内容と方法

## (1) つかむ～漢字学習の楽しさを感じさせる教材の工夫

ゲーム性のある学習教材の開発と実践、パソコンソフトやオンライン学習ゲームの調査及び紹介を行い、漢字学習に対する児童の意識を変容させる。

## (2) 広げる～漢字そのもののおもしろさに興味をもたせる指導の工夫

漢字の成り立ちや関連エピソード、他の漢字とのつながりを交えた指導、部首ごとにまとめる体系的な指導やプリント教材の作成を行い、漢字に対する興味をもたせる。

## (3) 深める～自主的な漢字学習を促す支援の確立

掲示物や漢字辞典、練習プリント等の学習環境を整備し、家庭学習での調べ学習等を賞賛・推進することで、児童が漢字学習に主体的に取り組めるように支援する。

## (4) 確かなものにする～全校体制で定着を図る検定型教材の開発

指導者・学習者相互ができるだけ負担の少ない形で漢字の定着を図れるように、全校で取り組む自校式漢字検定型プリント教材の作成、練習・検定・賞賛等の体制作りを行う。

---

\* 小千谷市立和泉小学校

## 4 研究の実際

### (1) つかむ〜漢字学習の楽しさを感じさせる教材の工夫

まず、漢字を使ったゲーム性のある学習活動に取り組むことで、漢字に対する児童の意識を変容させることから着手した。

#### ① 漢字カルタ

漢字そのものを取り札とする漢字カルタは数社から市販されているが、へんかつくりを組み合わせることで漢字を作るカードゲームとしては、「漢字博士No1」<sup>2)</sup>がある。ただし、カルタというより、数人でテーブルを囲む花札形式のカードゲームである。そこで、児童全員でカルタのように遊べるよう工夫した。厚紙をB6版程度の大きさに裁断し、そこに漢字のパーツを書き込んだものを作成した。まず部首の書かれた読み札を全員に提示する。児童は、ばらまいてあるカードの中から、それとうまく合う「つくり」の札を探す。取っても、それが何という漢字でどんな使い方をするか答えられないとお手つきになる。取った後も、「満は、満員・満足・満タン。」と、熱心に使い方を考える姿が見られた。個人戦にすると、取れる児童と取れない児童の差が出てしまうので、2チームの対戦方式にし、仲間同士で教え合うことで、あまり漢字を知らない児童でも楽しく参加することができるようにした。



写真1 〔漢字カルタ〕

漢字といえばひたすら机上で書き取り練習というのが当たり前だった児童にとっては、ゲームとして漢字を楽しめるということが、とても新鮮だったようである。国語の時間だけでなく、休み時間にもやりたがる児童が多かった。最初の対戦では、あまり漢字が思い浮かばずに取れなかったことから、次の対戦に向けて、家庭学習で「さんずいの漢字」や「木へんの漢字」をまとめて調べ、準備をして臨む児童も見られた。また、繰り返し取り組むことで、「さんずいと言えば、〇と〇。」と、反射的にカードを取れる児童が増え、フラッシュカードのような効果が得られた。

#### ② 漢字しりとり

「漢字カルタ」では、漢字の字形に興味をもたせることができた。そこで、次のステップとして、漢字の熟語に対する興味を高めることをねらい、「漢字しりとり」に取り組ませた。「カンジー博士の漢字しりとり」(光村図書「国語」4年下)では、いくつかの漢字しりとりが紹介されているので、それを参考にした。基本ルールは、最初の熟語の後ろ1字を使って次の熟語をつなげていくゲームである。例えば「学校→校庭→庭園→園長」といった具合につなげていくのである。しりとりと同様、一度使った漢字は二度使うことができない。ただし、「河川→川原→原因」のように、つなげたい漢字は、音読みしても訓読みしても構わない。



写真2 〔漢字しりとり〕

授業では、チームで何文字つなげられたかを競い合う対戦形式で行った。そのため、漢字の熟語に不慣れな児童でも、協力し合うことで安心して取り組めた。また、書き取る児童、辞書を使って調べる児童など、次第に役割分担しながら取り組む姿が見られた。さらに、個人としての新記録を目指し、家庭学習で取り組んでくる児童が多く見られた。漢字辞典、国語辞典を駆使して、200字以上もつなげてきた児童もいた。漢字の熟語に対する関心を高めることができた上に、漢字辞典、国語辞典の使い方にも慣れ親しませることができた。

#### ③ 漢字学習ソフト・漢字のホームページ

小学校全漢字1006字の書き順・送り仮名・部首・画数などの実力をチェックできる漢字ゲームや実力完成テスト機能を収録したソフトがある。普段、紙面上での学習には意欲的でない児童も、パソコン画面に向かうだけで意欲が高まるのが現代っ子である。遊びながら漢字に親しむことができた。

また、無料のオンライン漢字ゲームなどを扱うホームページがある。試用し、効果があると思われるものを一覧にし、学級便りで紹介したところ、親子で楽しむ家庭も見られた。「ふつう、ゲームをしていると親に叱られるが、学習につながるということで、逆に褒められた。」という児童もあり、家庭でのゲーム環境の改善にもつなげることができた。

(2) 広げる～漢字そのもののおもしろさに興味をもたせる指導の工夫

漢字を使ったゲームに親しむことで、児童は次第に漢字学習に関心を持ち、より詳しく知りたがる児童が増えてきた。児童の多くは、社会科の学習や給食時の雑談の中で、物事の裏話や思わず「へえ。」と、うなるような雑学話に強い関心を示した。そこで、漢字についても、成り立ちや関連エピソードについて学習することで、興味・関心を高められるのではないかと期待し、実践した。

① 漢字の成り立ち指導

漢字の成り立ちを調べていくと、文献によって様々な解釈が存在する文字もある。字源には、「學」「氣」「畫」といった漢字のように旧字体でこそ理解できるものや、小学生には理解しがたい歴史的な背景もある。そのため、本来の字源とされる説に固執して提示すると、かえって児童が混乱することがある。また、「民」のように、字源が殺伐としたものであるために、授業で提示するにはふさわしくないものもある。そこで複数の参考文献で示されている諸説の中から、小学生でも親しめる成り立ちや関連するエピソードをまとめることにより「くり式漢字プリント」(図1)「くりくりのおもしろ漢字ワールド」(図2)を作成した。授業での新出漢字指導や、学級便りで紹介したことにより、「それまで何となく覚えていた漢字も、改めて学習することで、より印象深くなった。」「今までは新しい漢字が出ると、覚えるのが面倒くさいとしか思えなかったけれど、他の漢字もどんな意味があるのか、知りたくなった。」といったように関心を高めることができた。また、印象深く学習したことで、直後のミニテストの平均点が飛躍的に向上した。さらに、自らインターネットや漢字辞典で漢字の成り立ちについて調べてきた児童もいて、家庭学習における主体的な取組を促すという意味でも効果が得られた。

② 部首やテーマごとにまとめる体系的な指導

高学年になると、既習の漢字の数も多くなり、未習得漢字をひとつずつ取り上げて指導していくのは効率が悪い。そこで、部首ごとにまとめたり、似ていて混同しやすい漢字については、違いを比較しながら指導したりすると、効果的であった。(図3)。漢字を意味不明の線や点の集合としてとらえるのではなく、意味のある符号としてとらえることで、より印象に残りやすくなる。例えば、類似性の高い「又」「久」「父」は、書き間違えることが多い。ところが、「又」は手、「久」は足、「父」は鞭を持った人を表す符号という意味づけを行った上でそのつくりを含む漢字を眺めると、漢字の意味が鮮明に浮かび上がってくる。「後・復・麦・路といった漢字に父というつくりが使われているのは、足に関係があるからなのか。」と唸り、納得する児童が多かつ

図1 (くり式漢字プリント)



図2 (くりくりのおもしろ漢字ワールド)

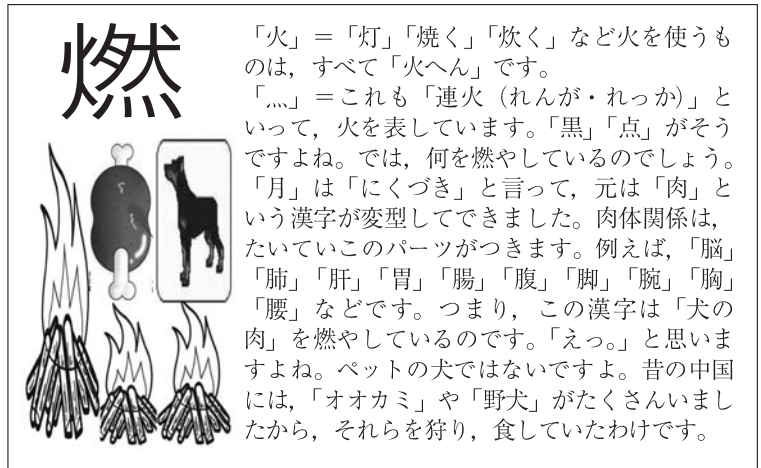


図3 (漢字を部首やテーマごとにまとめたプリント)





た。こうした類似性の高いつくりについてあらかじめきちんと指導しておくことにより、「どっちだったかな。」と迷っても、「手に関する漢字だから久ではなく、又だ。」と確認して書き取ることができる児童が増えた。

③ 漢字の成り立ちや部首を生かしたプリントの作成

漢字の成り立ちや部首の学習が進んできたので、さらに児童の意欲を高めるために、国語の時間の最初の3分を利用した確認プリント「3分漢クッキング」(図4)や、一度学習した漢字でも、違った楽しみ方のできるなぞなぞ形式の書き取りプリント(図5)を作成した。学級便りで紹介することで、親子で楽しむ家庭も多く見られた。クイズやなぞなぞなど、問題パターンが出そろった頃、自主学習でオリジナルの漢字クイズや漢字のなぞなぞ問題を作ってくる児童が増えた。作って来た問題を友達同士で見せ合い、お互いにチャレンジするのがおもしろかったようである。家庭学習の活性化にもつながった。

(3) 深める～自主的な漢字学習を促す支援の確立

漢字への関心が高まり、家庭学習において、主体的に漢字について調べたり、まとめたりしてくる児童が増えてきた。このことを受け、より多くの漢字にふれ、漢字を使用し、定着を図る方向で学習環境を整備した。

① 学習環境の改善(掲示物や漢字辞典等の整備)

いずれの漢字習得度調査を参照しても、「書き」の正答率が「読み」の正答率を下回る。つまり、漢字は読める時期が続いた後、ようやく漢字が書けるようになるのである。ならば、「習っていないから。」と言って、読めそうな漢字まで仮名表記をすることは、児童が習うまでにその漢字とふれる機会を少なくしてしまうことにつながる。下村昇は「新出漢字を初めて見させて、初めて読みを教え、そして同時に初めて意味を教えて、ついでにその時初めて書き順を教えて書かせる、ということは避けてください。」<sup>3)</sup>と述べる。できるだけ事前に漢字を使ってこれから習う漢字を提示し、学習する前に充分に見慣れさせておく必要がある。そこで、学習予定の漢字、小学校児童でも読めそうな漢字については、ルビを付けて積極的に提示するようにした。「はつ育そく定」ではなく「発育測定」、「ひなんくん練」ではなく、「避難訓練」と日常的に書くことを心がけた。また、1年間に学習する漢字を「圧」「移」「因」と一覧表として示すのではなく、「気圧」「移動」「原因」と学習する熟語の形で掲示し、新学期の早い段階ですべて読めるように指導した。さらに漢字辞典を日常的に活用できる環境を整備した。漢字辞典の使い方を明記した掲示物を作成し、漢字辞典といっしょに掲示しておき、誰もがいつでも使えるようにした。これにより、気になる漢字について休み時間に調べたり、手紙や感想を書く際に活用したりする姿が見られるようになった。

② 練習プリントの作成

「漢字学習は好きではない」の要因の一つが、ひたすら回数をこなす書き取り練習である。そこで、回数をこなすだけの書き取り練習にならないようなプリントを作成した。(図6)これは、問題が仮名書きされておらず、かわりに漢字の成り立ちをイラストで示してある。このイラストをヒントにシートを自分の力で埋めていく。「使い方」のところでは、その漢字を使った熟語を集めた分だけ得点上がるルールにした。いろいろな熟語を発見し、語彙数を増やそうとする意識を高めることができた。

③ 家庭学習の支援

漢字クイズや漢字なぞなぞに慣れ親しんだことで、家庭学習で自分でも漢字問題作りに取り組む児童が見られるようになった。作成してきた児童の問題を学級便りで紹介したところ、「私も作ってきました。」という児童が次々と現れ、ついにはクラス全員が作成に取り組むに至った(表1)。学級便

図4 (最初の3分を利用した確認プリント)

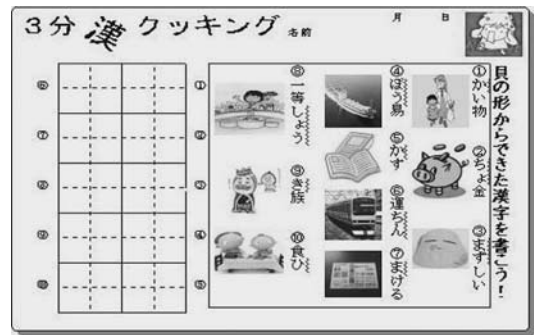


図5 (なぞなぞ形式の書き取りプリント)

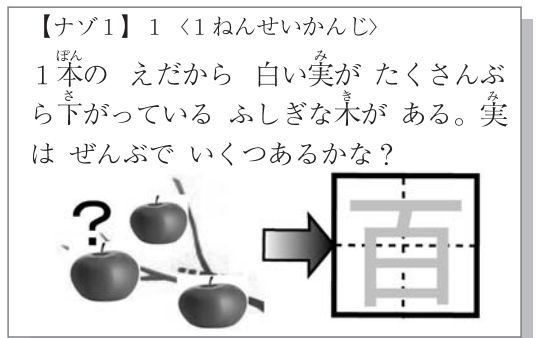
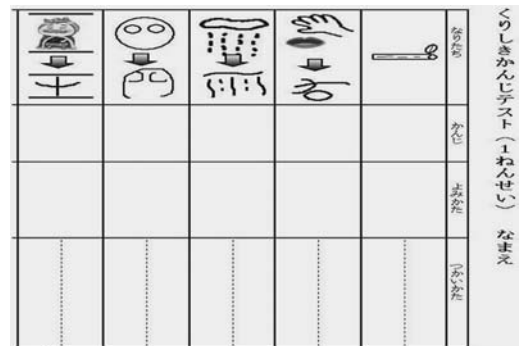


図6 (活用を促す漢字プリント)



りでの紹介により、家族から「家庭学習、がんばっているじゃないか。」と賞賛され、児童の意欲がさらに高まったようだ。

④ 学級便りを活用した漢字表記指導

「ひらがなでも、別に困らない。」という児童が多かった。そこで学級便りを活用して漢字使用を促した。児童の書いた作文については、必ず全員分を掲載し、各家庭に配付する。その際、ワープロソフトで活字にするが、児童が書いたまゝを掲載するという約束にした。保護者や祖父母に自分の作文を読んでもらえるのはうれしい。しかし、漢字をあまり使っていないのは恥ずかしい。そのためか、「漢字を使って書け。」と厳しく言わずとも、自分から進んで漢字を使って書こうと意識する児童が増えた。

表1 (児童作成の漢字クイズ)

<p>【Aさんからの出題】</p> <p>① 讠 + 共 + 己 =</p> <p>② 竹 + 目 + 井 =</p> <p>③ 自 + 田 + 井 =</p> <p>④ 己 + 己 + 共 + 讠 =</p>	<p>【Bさんからの出題】</p> <p>活 ↓ 空 → □ → 温 ↓ 球</p>
<p>【Cさんからの出題】</p> <p>① 期待に ( ) をおどらせる</p> <p>② ( ) によりをかけて料理するわ</p> <p>② 話の ( ) を折る</p>	

(4) 確かなものにする～全校体制で定着を図る検定型教材の開発

児童の関心が高まり、漢字学習環境が整ってきたところで、いよいよ最終段階として、小学校配当漢字の定着を図るためのステップに進む。「漢字はたくさんあって、練習するのが大変。」という児童が多い。当該学年の漢字だけでなく、前学年までの漢字の定着も図らなくてはならない。新出漢字だけでなく、読み替えの漢字まで含めると、膨大な数の復習が必要になってくる。せっかく漢字に興味をもったとしても、負担感が強いと定着につながらない。学習負担を軽減し、効率的に習得させていくためには、効果的な検定型教材の開発と全校で取り組む体制作りを行う必要がある。

学年別漢字配当表により、小学校で指導すべき漢字は明らかにされている。しかし、その漢字をどういった語で児童に提示すべきかは明示されていない。「学習の成立の可否は、指導者の側の目標と方法だけでなく、学習者の側の準備状態によって決まる」<sup>4)</sup> のであれば、やはり新出漢字においても、その学年の児童が学習するにふさわしい語で提示されるべきである。第1学年配当漢字「空」であれば、「上空」「空港」「空席」「航空機」「空気」「空(そら)」「空っぽ」等の数ある熟語の中から、「空気」や「空(そら)」を選択することが望ましい。しかし、この点については、使用する教科書により左右され、学年が上がるに連れて配慮を欠くこともある。説明文や物語文の中に配当漢字を組み込めない場合、その多くが小単元でまとめて提示されることも多い。また、児童が初めて目にするような語で新出漢字が提示されることも少なくない。(表2) はたして、児童にとって馴染みのない「位牌」「得体」「移築」「講義」といった語を提示した場合、負担のない漢字学習が成立するのか疑問である。そこで、各習得度調査結果<sup>5)</sup> を分析してみたところ、いずれの年代の調査結果でも似たような傾向が見られた。(表3) これらの調査結果を参照することにより、本来その漢字を提示する際にふさわしい語とそうでない語を判別することができる。例えば6年生に「映」という漢字を指導する際、「映る」という訓で提示するよりも、「映画」という語で最初に提示した方が、効率的な習得につながると考えられる。学習者側に立って考えれば、「映画」「延長」で定着を図り、それを活用して「映る」「延びる」を二次的に習得させることの方が自然であると言える。これらのことをふまえて、学校独自の「漢字検定」プリントの問題文を作成していった。

表2 (各教科書出版社の漢字の取扱)

漢字	配当学年	教育出版	光村図書	学校図書
位	4年生	二位	お位牌はい	地位
得	4年生	ヒントを得る	答えを得る	得体
移	5年生	移住	移動	移築
義	5年生	講義	正義感	正義

※いずれも平成4年度版

表3 (各調査結果による漢字の音訓別「書き」習得度状況)

漢字	音訓	熟語	国立国語研	初等教育研	文化庁調査
映	エイ	映画	○80%	○68%	○79%
	うつーる	映る	●37%	●39%	●37%
延	エン	延長	○48%	○73%	○77%
	のーびる	延びる	●34%	●45%	●42%

まず小学校配当漢字1006字を30級に振り分ける。これ以上多くなるとゴールとなる1級までが遠くなり、児童の意欲が減退する恐れがある。また、これより級の設定を少なくすると1級あたりの設問数が多くなって、なかなか進級できない。1年生を除き、各学年4つ級で配当漢字のすべてを確認できるようにした。合格しようとするあまり、直前に詰め込み学習をしてしまう児童の多くは、時間の経過と共に忘却することも多い。これを防ぐために、各級の合間に、かつて合格した級をもう一度受検する再検定級を設定した。次に、「往・復」「貿・易」「状・態」と熟語にて

きるものではできるだけ組み合わせ、習得度調査結果を参照して、児童に提示するにふさわしい語を精選していった。これらの熟語をさらにできるだけつなげて、ひとつの文になるよう作文していった。各学年につき200字近い配当漢字を64の問題文に凝縮することに成功した。これだと、A3用紙の裏表印刷で1枚に収めることができる。児童が繰り返し取り組むことを考えると、印刷する手間と資源をできるだけ少なくする必要がある。また、児童にしてみれば、用紙1枚分の漢字をしっかりと練習すれば、その学年の配当漢字をすべて習得できる。こうしてできあがった漢字検定を冊子にし、全校児童に配付した。練習や検定の時間は、家庭学習や朝学習を活用することで、授業での負担を軽減すると共に、家庭学習への主体的な取組を促すことができた。「家庭学習で何をすればいいかわからない」と述べていた児童も、この冊子により、家庭学習を進められるようになった。また、学年に応じた目標級を設定し、到達した児童には、認定証を発行したことで、さらに意欲を高めることができた。

5 考察（成果と課題）

1年間の実践を経て、児童にアンケートを実施したところ、18名全員が、「漢字の学習がおもしろくなった。」と答えた。また、A児のように最初は漢字を使うことに強い抵抗を感じていたのが、どんなに時間がかかろうとも、熱心に辞典を使って漢字表記しようとする児童が増えた。（表5）さらに、学期ごとに実施している漢字定着テストでは、以下のような結果が得られた。

	5年生1学期	5年生2学期	5年生3学期	6年生1学期
平均点	89.8点	94.5点	94.1点	94.3点
100点	6人	8人	9人	13人
合格者	15/18人	16/18人	18/18人	16/18人

漢字練習に意欲がもてず、いつも再テストにならないと奮起できなかった児童が、一発合格目指して早くから練習に取り組むなど、学級における漢字学習時の雰囲気はとてよくなった。ただ、合格した定着テストであっても、時間をおいて再実施してみると、忘れてしまっている児童も見られる。完全な定着を図っていくためのさらなる手立てが課題である。

無理を強いるのではなく、まず漢字そのもののおもしろさに興味をもたせることから始め、児童の変容に合わせて授業改善を行っていったことで、児童は主体的に漢字学習へ取り組むようになった。そして、結果として漢字の習得率向上につながられることを、本研究により確認することができた。

引用文献

注<sup>1</sup>) 日本教育技術学会 基礎学力調査委員会「小学校学習漢字習得状況の調査報告」2007年  
 注<sup>2</sup>) 馬場雄二「漢字博士No1」（奥野かるた店）  
 注<sup>3</sup>) 下村 昇『生きている漢字 死んでいる漢字』高文研 2006年  
 注<sup>4</sup>) 『新教育学大事典 第6巻』第一法規出版 1990年 P550  
 注<sup>5</sup>) 国立国語研究所調査結果『児童・生徒の常用漢字の習得』東京書籍 1988年  
 初等教育研究所調査結果 海保博之・野村幸正『漢字情報処理の心理学』教育出版 1983年

表4（漢字検定問題の作成手順）

ア 各学年ごとの級の設定

1年生	30級～29級	(再)20級
2年生	28級～25級	(再)19級～18級
3年生	24級～21級	(再)17級～16級
4年生	15級～12級	(再)7級～6級
5年生	11級～8級	(再)5級～4級
6年生	3級～準1級	(再)1級

イ 漢字語とに提示音訓を精選

永	○エイ	×ながーい
久	○キユウ	×ひさーしい
再	△サイ	×サ ○ふたたーび

ウ 漢字につなげて作文

<input type="checkbox"/>	永久に不可能な話
<input type="checkbox"/>	手術のため再び検査する

エ 漢字問題1シート完成

5年生で習う漢字③		10級	5年生③④
⑧	親の財産で経営する。	④	布を織る技。
⑦	政治に興味がある。	③	確実に成績が上がる。
⑥	採集した虫を飼う。	②	手術のために再び検査する。
⑤	講演会に妻と出かける。	①	永久に不可能な話。

表5（A児の変容）

<5年1学期>ほくがうんどう会でがんばりたいことは、おうえんです。りゆうは、ほくがおうえんだんだからです。赤ぐみにまけないようにせいっぱいたたいしています。ゆうしょうとおうえんしょうをとりたいたいです。みんなのきたいにこたえられるようにがんばりたいです。

<5年3学期>ほくががんばったことはエプロン作りです。まず、下の部分を三つ折りして、その後、アイロンをかけます。それからミシンでぬいます。B君が、「ここは、こうやるんだよ。」と言ってくれました。そのおかげで、できました。とても感謝しています。ほくは、何か物を作るのが好きです。今度はいろいろな物をもっと上手に作りたいです。